

発足二年目の山城高校の三年間

山城4回 乙 部 秋 良

昭和二十四年四月、私は西京高校附設中学三年から山城高校一年に転校、進級した。進級と書いたのは、旧制中学生は入試を受けているということで高校入試は免除になり、その代わりに中学校の卒業証書は貰えなかった。だから高校生になっても中学生の延長のような気分が残っていたからである。この卒業証書の省略は、紙不足の当時、用紙の節約が目的であつたという説もある。

昭和二十二年から実施された教育改革により義務教育となつた新制中学生の急増による教室不足は依然として解消しておらず、一クラス男女あわせて五十名、我々の学年は十五組、約七百二十名（その内、山城併設中学から進学したものは多くて四百名と推測される）のマンモス校となった。翌年には洛北高校、嵯峨野高校、紫野高校が開校し、本人の希望により転校した者もあり、結局、山城高校を卒業したものは五百九十三名で

あった。

卒業までの三年間、幸いなことに私は本校で唯一の鉄筋コンクリート造三階建て南校舎（俗称新館Ⅱ昭和十四年竣工）を上階に移動しながら過ごした。新館とはいえ戦後四年、まだまだ物不足で戦前に建った新館の修繕も行き届いていなかった。そのような中でその椿事は新館一階の教室で起こった。

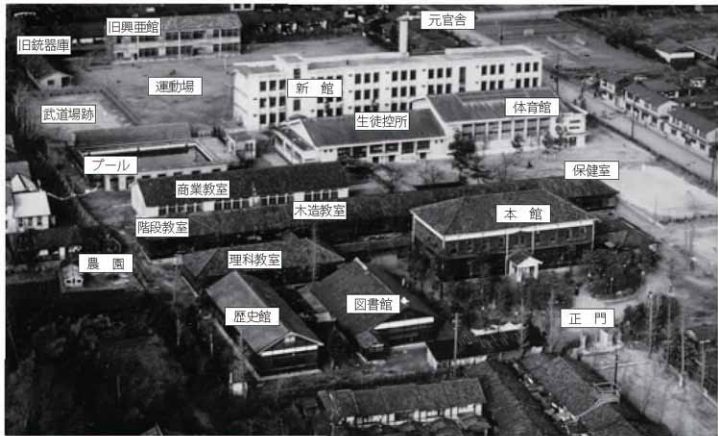
一年四組の教室は東階段の東隣にあった。授業中のこと、先生が教本を左手に持って生徒の朗読を聞きながら紙面に目をやっておられた。その時、無造作に床に伏せてあった造り付けの戸棚の扉を片付けようとでも思われたのか、教壇を下りてその扉を右手で持ち上げ二三步前進された。実はこの扉の下には扉より小さめの床下改め口があり、その下は地下ピットになっていた。改め口の蓋がいつしかなくなり、誰となくこの戸棚の扉を蓋代わりに床の上に置いていたのである。

突然先生の姿が教室から消えた。「先生が落ちた」と教室中が大騒ぎになった。生徒がおそるおそる扉を持ち上げると、S先生が驚いた様子で地下ピットのごみの山に半身を埋めて立っておられた。幸い先生にお怪我はなく床に手を掛けて登ってこられ、何事もなかったように授業を続けられた。今にして思えば、先生が無事だったのは何年もの間、掃除の度にごみをこの床下に掃き落として出来た、このごみの山のお陰であった。先

輩からの暖かい贈り物なのである。

窓の建具金物は破損していたが、ガラスが殆ど割れていたの
で、大風が吹くからといって慌てることもなかった。馬代通り
に面した通用門は扉の丁番が壊れていて、観音開きの扉は開け
た状態でそとと石の台の上に置かれていた。校門が開け放しで
あったことは、三年になって受験勉強でつい朝寝坊をしたもの
にとつては大変有り難かった。

一年生の思い出は瀬田川で行われたクラス対抗ボートレース
でわが四組が優勝したこと。放課後、担任の甲斐先生に引率さ
れて御室の山に焼き芋コンパに行ったこと。二年では宮川良造
君らとクラス誌を数回発行したこと。その一部は今もわが家の
書棚にある。三年は受験勉強仕上げの時期でもあり模擬入試の
思い出と、それから卒業式の後、現在の高島屋京都店の地下に
あった公衆会館へ映画「天井桟敷の人々」を見に行き、上映中
に短い地震があり、観客が総立ちになった記憶ぐらいである。
なおこの地震がM6.5の石川県西部沖を震源とする『大聖寺沖
地震』だとすると卒業式は三月七日にあったことになるのだが。
優れた指導者、愛情に溢れた先生と良き友人に恵まれ、社会
人になるための基礎を研鑽した充実の三年間であった。懐かし
き校舎はレンガ造りの門柱のみを遺すところとなったが、その
思い出は我が胸中に金色の光をはなって輝きつづけるであろう。



昭和 27 年（1952）の山城高校